うず潮

大和書房版

うず潮

一九六四年一二月一〇日　初版発行
定価　三九〇円
著者　林　芙美子
発行者　大和岩雄
発行所　東京都中野区松が丘二の三一
大和書房
電話　（九五二）一三七一～三
振替　東京六四二二七
製版　日放印刷
印刷　東光印刷
製本　鵜幸堂

◎林 芙美子

大和書房

うず潮

花のいのちは
みじかくて
苦しきことのみ
多かりき

林芙美子

小説「放浪記」の頃――関東大震の後、父母のもとに帰る（二〇才

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

小説「市立女学校」の頃――尾道高等女学校を卒業（中央・一七才）

小説『清貧の書』の頃（二五才）

目次

うず潮

風琴と魚の町……九
市立女学校……二五
放浪記……五五
清貧の書……一四九
鶯……一六九
うず潮……一九二

装幀　白川絢子

うず潮

風琴と魚の町

1　父は風琴を鳴らすことが上手であった。

音楽に対する私の記憶は、この父の風琴から始まる。

私達は長い間、汽車に揺られて退屈していた。母は、私がバナナを食んでいる傍で経文を誦しながら、泪していた。

「貴方に身を託したばかりに、私はこのように苦労しなければならない」と、あるいはそう話しかけていたのかも知れない。父は、白い風呂敷包みの中の風琴を、時々尻で押しながら、粉ばかりになった刻み煙草を吸っていた。

私達は、このような一家を挙げての遠い旅は一再ならずあった。

父は目蓋をとじて母へ何か優し気に語っていた。「今に見いよ」とでも言っているのであろう。

延々とした汀を汽車は這っている。動かない海と、屹立した雲の景色は十四歳の私の眼に壁のように照り輝いて写った。その春の海を囲んで、沢山、日の丸の旗をかかげた町があった。目蓋をとじていた父は、朱い日の丸の旗を見ると、せわしく立ちあがって汽車の窓から首を出した。

「この町は、祭でもあるらしい、降りてみんかやのう」

母も経文を合財袋にしまいながら、立ちあがった。

「ほんとに、綺麗な町じゃ、まだ陽が高いけに、降りて弁当の代でも稼ぎまっせ」

で、私達三人は、各々の荷物を肩に背負って、日の丸の旗のヒラヒラした海辺の町へ降りた。

駅の前には、白く芽立った大きな柳の木があった。柳の木の向うに煤で汚れた旅館が二、三軒並んでいた。町の上には大きい綿雲が飛んで、看板に魚の絵が多かった。

浜通りを歩いていると、ある一軒の魚の看板の出た家から、ヒュッ、ヒュッ、と口笛が流れて来た。父はその口笛を聞くと、背負った風琴を思い出したのであろうか、風呂敷包みから風琴を出して肩にかけた。父の風琴は、おそろしく古風で、大きくて、肩に掛けられるベルトがついていた。

「まだ鳴らしなさるな」

母は、新しい町であったので、恥かしかったのであろう、一寸父の腕をつかんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

口笛の流れて来る家の前まで来ると、鱗まびれになった若い男達が、ヒユッ、ヒユッ、と口笛に合わせて魚の骨を叩いていた。

看板の魚は、青笹の葉を鰓にはさんだ鯛であった。私達は、しばらく、その男達が面白い身ぶりでかまぼこをこさえている手つきに見とれていた。

「あにさん！　日の丸の旗が出ちょるが、何事ばしあるとな」

骨を叩く手を止めて、眼玉の赤い男がものうげに振り向いて口を開けた。

「市長さんが来たんじゃ」

「ホウ　たまげたさわぎだな」

私達はまた歩調をあわせて歩きだした。

浜には小さい船着場が沢山あった。河のようにぬめぬめした海の向うには、柔かい島があった。島の上には白い花を飛ばしたような木が沢山みえた。その木の下を牛のようなものがのろのろと歩いていた。

2　ひどく爽やかな風景である。

私達は、蓮根の穴の中に辛子をうんと詰めて揚げた天麩羅を一つ買った。そうして私は、母とその島をみながら、一つの天麩羅を分けあって食べた。

「はようもどんなはいよ、売れな、売れんでもええとじやけに……」

母は仄かな佗しさを感じたのか、私の手を強く握りながら私を引っぱって波止場の方へ歩いて行った。

肋骨のように、胸に黄色い筋のついた憲兵の服を着た父が、風琴を鳴らしながら「オイッチニィ、オイッチニィ」と坂になった町の方へ上って行った。母は父の鳴らす風琴の音を聞くとうつむいてシュンと鼻をかんだ。私はぼんやり油のついた手を嘗めていた。

「どら、鼻をこっちい、やってみい」

母は衿にかけていた手拭を小指の先に巻いて、私の鼻の穴につっこんだ。

「ほら、こぎゃん、黒うなっとるが」

母の、手拭を巻いた小指の先が、椎茸のように黒くなった。

町の上には小学校があった。小麦臭い風が流れていた。

「こりゃ、まあ、景色のよかとこじゃ」

手拭でハタハタと髷の上の薄い埃を払いながら、眼を細めて、母は海を見た。

私は蓮根の天麩羅を食うてしまって、雁木の上の露店で、プチプチ章魚の足を揚げている、揚物屋の婆さんの手元を見ていた。

「いやしかのう、この子は……腹がばりさけても知らんぞ」
「章魚の足が食いたかなァ」
「何言いなはると！　お父さんやおッ母さんが、こぎゃん貧乏しよるとが判らんとな！」
　遠いところで、父の風琴が風に吹かれている。
「汽車へ乗ったら、又よかもの食わしてやるけに……」
「いんにゃ、章魚が食いたか！」
「さっち、そぎゃん、困らせよっとか？」
　母は房のついた縞の財布を出して私の鼻の上で振って見せた。
「ほら、これでも得心のいかぬか！」
　薄い母の手に、緑の粉を吹いた大きい弐銭銅貨が二、三枚こぼれた。
「白か銭は無かろうが？　白かとがないと、章魚の足は買えんとぞ」
「あかゝ銭じゃ買えんとな？」
「この子は！　さっち、あげんこッウ、お父さんや、おッ母さんが食えんでも、めんめが腹ばい肥やしたかなァ」
「食いたかもの、しようがなかじゃなっか！」
　母はピシッと私のビンタを打った。学校帰りの子供達が、渡し船を待っていた。私が殴られるのを見ると、子供達はドッと笑った。鼻血が咽へ流れて来た。私は青い海の照り返りを見ながら、塩っぱい涙を啜った。
「どこさか行ってしまいたい」
「どこさか行く言うても、お前がとのような意地っぱりは、人が相手にせんと……」
「相手にせんちゃよか！　遠いとこさ、一人で行ってしまいたか」
「お前は、めんめさえよければ、えゝとじゃけに、バナナも食うつろが、蓮根も食いよって、富限者の子供でも、そげんな食わんぞな！」
「富限者の子供は、いつも甘美かもの食いよっとじゃもの、あぎゃん腐ったバナナば、恩にきせよる……」
「この子は、嫁様にもなる年頃で、食うこッばかりいいよる」
「ぴんたば殴るけん、ほら、鼻血が出つろうが……」
　母は合財袋の中からセルロイドの櫛を出して、私の髪をなでつけた。私のふさふさした髪は櫛の歯があたるたびに、パラパラ音をたてて空へ舞い上った。
「わんわんして、火がつきゃ燃えつきそうな頭じゃ」
　櫛の歯をハーモニカのように口にこすって、唾をつけると、母は私の額の上の捲毛をなでつけていった。
「お父さんが商売があってみい、何でも買うてやるがの……」

3　私は背中の荷物を降ろしてもらった。

紫の風呂敷包みの中には、絵本や、水彩絵具や、運針縫いがはいっていた。

「風琴ばかり鳴らしよるが、商いがあったとじゃろか、行って見い！」

私は桟橋を駆け上って、坂になった町の方へ行った。町が狭隘いせいか、犬まで大きく見える。町の屋根の上には、天幕がゆれていて、桜の簪を差した娘達がゾロゾロ歩いていた。

「えゝ――御当地へ参りましたのは初めてでございますが、当商会はビンツケをもって膏薬かなんぞのようなまやかしものはお売り致しませぬ。えゝ――おそれおおくも、××宮様お買い上げの光栄を有しますところの、当商会の薬品は、そこにもある、こゝにもあるという風なものとは違いまして……」

蟻のような人だかりの中に、父の声が非常に汗ばんで聞えた。

漁師の女が胎毒下しを買った。桜の簪を差した娘が貝殻へはいった目薬を買った。荷揚げの男が打ち身の膏薬を買った。ピカピカ手ずれのした黒い鞄の中から、まるで手品のように、色んな変った薬を出して、父は、輪をつくった群集の眼の前を近々と見せびらかして歩いた。

風琴は材木の上に転がっている。

子供達は、不思議な風琴の鍵を、いじくっていた。ヴゥ！　ヴゥ！　このように、時々風琴は、突拍子な音を立てゝ肩をゆする。すると、子供達は豆のように弾けて笑った。私は占領された風琴の音を聞くと、たまらなくなって、群集の足をかきわけた。

「えゝ――子宮、血の道には、このオイチニイの薬程きくものはございませぬ」

私は材木の上に群れた子供達を押しのけると、風琴を引き寄せて肩に掛けた。

「何しょっと！　わしがとじゃけに……」

子供達は、断髪にしている私の男の子のような姿を見ると、

「散剪り、散剪り、男おなごやァい！」と囃したてた。

父は古ぼけた軍人帽子を、ちょいとなおして、振りかえって私を見た。

「邪魔しよっとじゃなか！　早ようおッ母さんのところへ、いんじょれ！」

父の眼が悲しげであった。

子供達は、又蠅のように風琴のそばに群れて白い鍵を押した。私は材木の上を縄渡りのようにタッタッと走ると、どこかの町で見た曲芸の娘のような手振りで腰を揉んだ。

「帯がとけとるどゥ」
竹馬を肩にかついだ男の子が私を指差した。
「ほんま？」
私はほどけた帯をお腹の上で結ぶと、裾を股にはさんで、キュッと後にまわして見せた。
男の子は笑っていた。
白壁の並んだ肥料倉庫の広場には針のように光った干魚が山のように盛り上げてあった。
その広場を囲んで、露店のうどん屋が鳥のように並んで、仲士達が立ったまゝ、つるつるとうどんを啜っていた。
露店の硝子箱には、煎餅や、天麩羅がうまそうであった。私は硝子箱に凭れて、煎餅と天麩羅をじっと覗いた。硝子箱の肌には霧がかゝっていた。
「どこの子なァ、そこへ凭れちゃいけんがのう！」
乳房を出した女が赤ん坊の鼻汁を啜りながら私を叱った。

4　山の朱い寺の塔に灯がとぼった。島の背中から鰯雲が湧いて、私は唄をうたいながら、波止場の方へ歩いた。
桟橋には灯がついたのか、長い竿の先に籠をつけた物売りが、白い汽船の船腹をかこんで声高く叫んでいた。
母は待合所の方を見上げながら、桟橋の荷物の上に凭れていた。
「何ばしよったと、お父さん見て来たとか？」
「うん見て来た！　山のごツ売れよった」
「ほんまな？」
「ほんま！」
私の腰に、また紫の包みをくゝりつけてくれながら、母の眼は嬉し気であった。
「ぬくうなった、風がぬるぬるしよる」
「小便がしたか」
「かまうことなか、そこへせいよ」
桟橋の下には沢山藻や塵芥が浮いていた。その藻や塵芥の下を潜って影のような魚がヒラヒラ動いている。帰って来た船が鳩のように胸をふくらませた。その船の吃水線に潮が盛り上ると、空には薄い月が出た。
「馬の小便のごつある」
「ほんでも、長いこと、きばっとったとじゃもの」
私は、あんまり長い小便にあいそをつかしながら、うんと力んで自分の股間を覗いてみた。白いプクプクした小山の向うに空と船が逆さに写っていた。私は首筋が痛くなる程身を曲めた。白い小山の向うから霧を散らした尿が、キラキラ光って桟橋をぬらしている。

「何しよるとじゃろ、墜ちたら知らんぞ、ほら、お父さんが戻って来よるが」
「ほんまか？」
「ほんまよ」
股間を心地よく海風が吹いた。
「くたびれなはったろう？」
母がこう叫ぶと、父は手拭で頭をふきながら、雁木の上の方から私達を呼んだ。
「うどんでも食わんか？」
私は母の両手を握って振った。
「嬉しか！　お父さん、山のごつ売ったとじゃろなァ……」
私達三人は、露店のバンコに腰をかけて、うどんを食べた。私の丼の中には三角の油揚が這入っていた。
「どうしてお父さんのも、おッ母さんのも狐がはいっとらんと？」
「やかましいか！　子供は黙って食うがまし……」
私は一片の油揚を父の丼の中へ投げ入れてニヤッと笑った。父は甘美そうにそれを食った。
「珍らしかとじゃろな、二三日泊って見たらどうかな」
「初め、廃兵じゃろう言いよったが、風琴を鳴らして、ハイカラじゃいう者もあった」
「ほうな、勇ましか曲をひとつふたつ、聴かしてやるとよかったに……」
私は、残ったうどんの汁に、湯をゆらゆらついで長いこと乳のように吸った。
町には輪のように灯がついた。市場が近いのか、頭の上に平たい桶を乗せた魚売りの女達が、「ばんより！　ばんよりはいりゃんせんか」と呼び売りしながら通って行く。
「こりゃ、まあ、面白かとこじゃ、汽車で見たりゃ、寺がおそろしく多かったが、漁師も多かもん、薬も売れようたい」
「ほんに、おかしか」
父は、白い銭を沢山数えて母に渡した。
「のう……章魚の足が食いたかァ」
「また、あげんこッ！　お父さんな、怒んなさって、風琴ば海さ捨てる言いなはるばい」
「又、何、ぐずっちょるとか！」
父は、豆手帳の背中から鉛筆を抜いて、薬箱の中と照し合わせていた。

5　夜になると、夜桜を見る人で山の上は群った蛾のように賑わった。私達は、駅に近い線路ぎわのはたごに落ちついて、汗ばんだまま腹這っていた。

「こりゃもう、働きどうの多い町らしいぞ、桜を見ようとてお前、どこの町であぎゃん賑おうとったか？」
「狂人どうが、何が桜かの、たまげたものじゃ」
別に気も浮かぬといった風に、風呂敷包みをときながら、母はフンと鼻で笑った。
「ほう、お前も立って、こゝへ来てみいや、綺麗かぞ」
煤けた低い障子を開けて、父は汚れたメリヤスのパッチをぬぎながら、私を呼んだ。
「寿司ば食いとうなるけに、見とうはなか……」
私は立とうともしなかった。母はクックッと笑っていた。厄物のようにぶわぶわした畳の上に腹這って、母から読本を出してもらうと、私は大きい声を張りあげて、「ほごしょく」の一部を朗読し始めた。母は、私が大きい声で、すらすらと本を読む事が自慢ででもあるのであろう。
「ふん、さようかや」と、度々優しく返事をした。
「百姓は馬鹿だな、尺取虫に土瓶を引っかけるてかい？」
「尺取虫が木の枝のごつあるからじゃろ」
「どぎゃん虫かなァ」
「田舎へ行くとよくある虫じゃ」
「ふん、長いとじゃろ？」
「蚕のごつある」
「お父さん、ほんまに見たとか？」
「ほんまよ」
汚点だらけな壁に童子のような私の影が黒く写った。風が吹き込むたび、洋灯（ランプ）のホヤの先が燃え上って、誰か「雨が近い」と言いながら町を通っている。
「まあ、こんな臭か部屋、なんぼうにきめなはった？」
「泊るだけでよかもの、六拾銭たい」
「たまげたなァ、旅はむごいものじゃ」
あんまり静かなので、波の音が腹に這入って来るようだ。
蒲団は一組で三枚、私はいつものように、読本を持ったまゝ、沈黙って裾へはいって横になった。
「おッ母さん！　もう晩な、何も食わんとかい？」
「もう、何ちゃいらんとッ、蒲団にはいったら、寝ないかんとッ」
「うどんば、食べたじゃろが？　白か銭ば沢山持っちょって、何も買うてやらんげに思うちょるが、宿屋も払うし、薬の問屋へも払うてしまえば、あの白か銭は、のうなってしまうがの、早よ寝て、早よ起きい、朝いなったら、白かまんまいっぱい食べさすッでなァ」
座蒲団を二つに折って私の裾にさしあってはいると、父はこう言った。私は、白かまんまということばを聞くと、ポロポロと涙があふれた。
「背丈が伸びる頃ちゅうて、あぎゃん食いたかものじゃ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.